
死刑執行中脱獄進行中

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死刑執行中脱獄進行中

【Nコード】

N73100

【作者名】

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

【あらすじ】

文芸部の会話劇。

その中心には、人の『死』が。

(前書き)

い。シリーズ二作目なんで、良かったら一作目も読んでやってください。

大木樹は、通っている県立高校の文芸部の部員である。

彼は本なんて一切読まない人間であり、国語の教科書の小説ですら読む気も起きないような男ではあったが、簡単な人間的な動機を持ってこの文芸部に所属していた。

「って、由愛先輩だけですか」

文芸部室の蝶番が壊れかけた扉を開けて、樹はがっかりしたような声を隠しもせずに、部室の机に座って行儀悪く本を読んでいる女子生徒に目を向ける。如何にも図書館の隅で本を読んでいそうな少女で、メガネをかけ染めたことのない髪が西日に輝いていた。

「なによ、樹。この由愛ちゃんじゃあ不満？」

「見慣れた彼女の顔を見ても、何の感慨も沸きませんよ。メガネのレンズが片方外れていたり、雑巾を頭から被っていたり、制服がビリビリに破かれて体操服着て失禁とかしていたりしたら俺も慌てますけど、普段通りに何時も通りに何かの道理のように本を読まれていたら、不満もつりませんよ」

「そう言う所が、私は好きだよ。樹」

メガネの位置を微調整しながら、由愛は立ち上がると備え付けの冷蔵庫（！）の前まで歩いしゃがみ込む。小さな冷蔵庫の中から樹が買いだめをした微糖コーヒーを取り出して、樹に手渡す由愛。

毎度の光景だが、『自分でコーヒー位は取るのにな』と思わなくもないが、潤滑な人間関係の為に口にしなない。誰かの役に立ちたいと言う、その脅迫的な願望は樹にもよく理解できるものであった。樹の価値観はすべて『人間関係』に収束されている。らしい。らしいと言つのは、樹の言葉はどうにもこっぴどくも全てが嘘くさく感じられるからである。彼女である由愛でさえ、樹が正気なのかを疑うほどだ。

「さて、王毅先輩がいないなら、俺は帰りますよ。じゃあ由愛先輩、

今日の晩御飯はコロッケにしようと思imasuので、よかつたら食べに来てくださいね」

「帰るの？ 久々に部室で二人つきりなのに！」

「王毅先輩がいない文芸室なんて、爪楊枝しかないたこ焼きですよ」
樹が文芸部員になったのは、三年の中江田王毅と言う先輩に会いたいからである。名前の通り常に王様の如く偉そうで、名前のように生徒会長に君臨していた先輩。彼には人間関係と言う一点に置いて、樹は一目を置いていた。誰とでも一方的にしか人間関係を結ばない彼の態度は、非常に羨ましい。

「私、爪楊枝！？ でも、樹がたこ焼きを食べるには必須だよな？
ってことは、たこ焼きを食べると言う一点に置いて、爪楊枝もたこ焼きも同列に語るべきだよな？」

「じゃあ、さようなら。由愛先輩」

缶コーヒを持っていない片手を振って、樹はさっさと由愛に背を向ける。

「ちょっと待って！ 本当に帰るの？」

慌てて去りゆく樹の背中に抱き着いて、由愛は退室の邪魔をする。「そりゃあ、そうですよ。学校の部室をカプルのいちやく場所にしたら怒られちゃいますよ」

「うぐ。正論だけど！ 正論だけど！ そこは私に対する愛が勝つて！」

「愛で地球が救われたことありますか？ 勝つのはいつも根本的な残酷原理なんですよ」

「救われるよ！ 私が救われるよ！」

結局、抱き着かれて身動きが取れなくなった樹はうんざりとしながら「はいはい」と、椅子に座る。当然、由愛は樹の尻にひかれる背もたれとなる格好となるが、何故だか至福そうに笑っている。

「で、何か話があるんですか？ 由愛先輩」

「まずさ、その先輩を取ろうよー」

「ダメです」

学校では先輩を付けると言うのが、樹なりの人間関係らしいのだが、当然由愛はそれが気に入らなかつた。と言うか、すでに一つの椅子の上で抱きつかれた状況なのだから、学校の中も外もあつたものではない気がする。

これ以上ないバカツプルである。

「言うと思った。でさ、どうしても気になることがあるの」

「なんででしょうか？」

缶コーヒーを机の隅に置いて、樹は頭を掻く。

「遙つて知ってる？」

聞き覚えのある名前に、樹は雨降りの日を思い出す。あの時自転車に乗せたのが、遙と言う名前の先輩だったと記憶は言っているが、何故に自分の愛しい彼女からその名が出るのか。あれだけのことで浮気とみなされてしまうのだろうか？

机の上に置いてある、先ほどまで由愛が読んでいた本の題名を何ともなしに視界に入れると、『他人を苦しめた百の方法』とゴシツク調で書かれた凶鑑だった。

「……知っていますよ。雨の日に困っていたので、荷台に乗せてあげました」

凶鑑から目を離さずに、樹は普段通りを心掛けて答えた。嘘を吐くタイミングではないと判断したので、正直に答える。

すると、何故だか安心したように由愛は息を漏らす。

「いやね、あの娘前に好きな子が『三年』にいるって言ってたんだけど、今一年の男の子と付き合ってるらしいの」

「女の子じゃあなくて良かったですよ」

「それで、おかしいなって思ったわけ。結構単純で純情娘だったから、そんな簡単に好きな人を変えるわけがないでしょ？ それが急に心変わりしたから、これは良くない前兆か、それとも樹の暇つぶしかの二択だったわけ」

「女の人の勘つて言うのは、素晴らしいですね、その通りです、噂の張本人は俺です」

呆れたように、自分の背中に顔を押し付けている由愛の頭を器用に撫でる。細い髪の質感が、掌をくすぐる。

「噂っていうのはベンジヨンソンより早く駆け抜けていきますね」

「ウサインボルトにしておこうよ、そこは」

たしか、あの噂を流したのは会った当日であったから、一週間と少ししか流れていない計算だ。

「しかも、正確には回らない所が完璧です」

樹が流した噂は、『二年の遙は、一年生の斉藤のことが好き』である。それがいつの間にか『付き合っている』まで発展している。これは樹にとっては予想通りではあったが、中々に興味深い展開だ。

二人が付き合っていると言う『噂』が、真実になるか否か。それが樹の行った今回の実験だった。もつとも、もう付き合っている可能性もあるのだが、それはわからない。

なんとももどかしいこの状況を、樹は十二分に楽しんでいた。

「良いですか。俺のやりたいことは『人間関係は何処まで理想に似るか』です」

人間は本当に現実から正確に物事を認識できるのか。

人間はもしかして認識から現実を作っているのではないのか。

この『噂』通りに、二人が付き合い出したら、面白いのではないか。

そんな程度の気まぐれから行った実験だった。

ターゲットになった斉藤は、本当に遙のことが好きらしいし、二人は同じ掲示委員会に所属しているので、樹にとって都合のいい実験対象だった。

「ふーん。退屈なことするね。どうなれば勝ちなの？」興味なさそうに由愛は呟く。

「勝ち負けでも善悪でもありません。どちらでも俺は良いんですよ」「得もろくなこともないの？」

「他人の幸せの為に尽力するのが俺の趣味なんですよ」

「主人公体質だね」

「マゾですから」

樹の言葉に、由愛はからからと笑ってより一層力を込めて抱き着く。太腿と胸部の柔らかさが、厚い生地 of 制服を通して樹の肌に触れる。大きなヌイグルミの抱き心地に、由愛は満足そうに微笑む。その柔らかかな万力に、樹はどうしたものかと苦笑する。

暫く無言でそのゆっくりとした時間を楽しんだ後、樹は思い出したように「じゃあ、帰ります」と、由愛に申告してみた。帰る気はすっかり失せていたが、可愛らしい年上の彼女を少しだけ困らせてみたくなった。人間関係の確認をしたいと言う、わかりやすい我儘であることを自嘲しながら。

返事はやはり『否』であった。由愛の抱きしめる力はさらに強くなり、話題を作ろうと先ほどまで自分が読んでいた本の題名を読み上げた。

「『他人を苦しめた百の方法』一緒に読もうか。取って」

言われた通りに、樹は手を伸ばしてその購買意欲の削がれる本を手にする。百個の方法が書かれているとは思えない重量感を持ったその本は、読書嫌いの樹にとって存在だけで苦痛であった。

「何は描かれているんです？ この本」

「んー、昔に行われていた刑罰。火責めとか、車裂きとか、ギロチンとか、水牢とか」

それはまた、随分と物騒な本である。

「人間の根本的な残酷原理ですか」

「こそ。ほら私、小説書いているでしょ？ それに使えるかなーって思ってる」

文芸部員で唯一小説を書いている彼女の作品は、中世を舞台としたファンタジーである。戦闘や政治よりも、ラブロマンスに重点を置いた作品だったはずだ。

「こつ言った、細かい庶民生活の時代背景が、小説のリアリティを増すんだよ」

「恋愛小説のリアリティに、どうしてこんな酷い資料が必要なんで

すか」

もしかして、今の自分は由愛によって死刑にかけられているのではないだろうか。そんな不安が一瞬頭をよぎったが、こんな柔らかい死刑があるはずないと、かぶりを振って否定する。

大凡、図書室に行った時に偶々目に留まったのだろう。樹とは正反対に由愛は濫読家だ。節操なく本を読んでは、その感想を樹に熱く語ってくれるし、一緒に小説を音読したことも少なからずある。

「それでね、これ見てよ。動物系の刑罰」
器用に二人羽織の要領で由愛は樹の手元から本を奪い取ると、お目当てのページを探す。

そこに書かれていたのは、身体を拘束されて身動きできない半裸の男と、その足の裏を舐める一匹の羊だった。

刑罰と言うにはあまりにも間抜けなその絵面に、樹は思わず吹き出してしまふ。

「なんですかこれ、若手芸人の特訓ですか？」

「違う違う、恐ろしい刑罰だよ」

やり方は簡単。足の裏に塩水を塗り、それを羊が延々と舐めるだけ。どうやら羊にはそういった習性があるようで、本能的なこの行為を羊は全くやめようとはしないらしい。

馬鹿馬鹿しいシニールな刑罰にも思えるが、普段は触れられない足の裏を嘗め回されるのは想像を絶する苦痛で、失神する人間も珍しくはないらしい。

由愛の説明が大袈裟でないことを、解説の文を読むことによって納得した樹は興味深そうにその絵を眺める。

「なるほど、効果的だね。これ、沢山の人が見ていたとしたら余計に最悪で完璧だ」

「だよ。こんな姿を記憶されちゃあ、一生の恥だよ。街を歩けなくなっちゃう」

「他のも見ていい？ 動物系は……いいや、だいたいわかるしね」
羊のような例外を除けば、肉食獣に喰わせるくらいしか思いつか

ないので、樹はパラパラと興味深そうにページを捲る。由愛は「えー、全身にはちみつを塗って八工をたからせる刑罰の絵もシユールなのに」と不満を口にしたが、樹に奪われた本に手が届くことはなかった。

「お！ ギロチンだ。これを考えた人間は、尊敬に値するよね。由愛先輩」誰もが知っている、処刑道具を見て樹は興奮するように語る。「『人道的』な処刑方法を謳う癖に、やることは首を落とす。残虐極まりない方法」

「正式な和訳は、『正義の柱』だってさ、皮肉ってる感じがいいよね」

嬉々と樹がページを捲り、先人たちの考えたその悍ましい処刑方法に目を通す。

先ほど由愛の言った『水牢』は聞いたことのない刑罰だったが、思いのほか単純な処刑方法だった。腰辺りまでの水が入った牢屋に、囚人を入れる。たったそれだけだが、言葉以上に苦しい刑罰に、樹は顔を顰めながら説明文を読んでいく。

「確かに、そんだけ水があっちゃ寝れないね。寝ちゃあいけないって言う恐怖と戦いながら、死んでいくのか」

「それに、浸透圧があるよ」

高校生ならば誰もが知っているであろう、単純な用語が、ここでは悪魔のような意味を持つ。

「人間と普通の水じゃあ、人間の方が圧倒的に『濃い』よね。血液とかで。その差をなくそうと、身体が水を吸うんだよ。薄めようと薄めようと吸い続けるけど、人間の身体は濃いよね。それで、最後には皮が破裂するまで水を吸うんだって」

きゃー、こわーい！ 由愛は本気なのかどうか、そんなことを叫んで樹に再び抱き着く。

「それにしても、恐ろしいのばかりですね。ホラー映画なんか撮らずに、この本を上映した方が皆、肝を冷やすんじゃないですか？ 間違いなく全米が次の日から肉を食べるのを辞めますよ」

嘘か本当なのか、すらすらと樹は用意していたようなセリフを口にする。

背中に抱き着き、文字通り尻に敷かれている由愛は嬉しそうに「そうしたら、貧困問題が解決するかもね」と相槌を打った。

それから二人は悲鳴に近い笑い声を上げながら、人間の悪意に目を通していく。

一時間ほどして、挿絵のついたページをすべて読み終わると、樹は本を机の上に投げ捨てた。そのことに文句をつけるでもなく、由愛はゆっくりと疲れを吐き出した後に、樹の頭を撫でた。

「ねえ、どうしてこんな非道で酷い方法を思いついたと思う?」

優しい猫を撫でるような声で、由愛は樹の耳元でささやく。

「人を殺すだけなら、こんな酷い方法はいらなないと思わない? 極端な話、頭をかち割ればいいだけの話でしょ?」

まるで自分は答えを知っている、と思わせぶりな由愛の台詞に樹は溜め息を吐く。こういう人間関係の取り方は、由愛に似合っているとはあまり思えないからだ。間違はなく、王毅が樹に物を教える時の真似なのだろう。樹はあの傲慢な先輩に『惚れ込んでいる』と自称するくらいなので、想像もしたくない危機を感じた由愛は無意識に王毅の真似をしたのだろう。

ここまでを妄想して、樹は改めて自分の彼女の可愛さを確認した。俺の彼女が可愛いわけがないわけがない。

「じゃあ、残虐なのには意味があるんですか?」

「その通り、何だと思う?」

どうやらクイズ形式で行われるらしく、尻の下の由愛は「ちつつちつつち」と口で時を刻む。無性に焦った気分になる樹だが、タイムアウトが何時なのかわからないのが何よりも辛かった。

「趣味?」

「ちつつち……ブー……ちつつちつつち」

「じゃあ、えーっと、そのー、あのー」

焦りの中で答えを導き出そうと、樹の口からは意味の分からない

声だけが漏れる。

「あーもう！ アウト！ ってか、何？ そんなにテンパる人だった？ 樹って」

予想以上に慌ててしまったことに、ショックを受けた由愛が身体を揺らす。樹は「ごめんごめん」と謝るしかできなかった。ぷよぷよのキャラクターかよと、自分に突っ込む余裕が出来たのはそれから三十秒後だった。

「まあいいや、じゃあ答えを発表します」

「わーわー」指笛を鳴らして、無理矢理にテンションを上げる樹。

「答えは、樹の大好きな『人間関係』だと思います」

「……？」

予想しなかった答えに、樹は疑問符の形に首を曲げる。

死刑と人間関係。

確かに関係は深そうだが、その残酷さが『人間関係』のせいだと言うのは何とも強引な気がしてならなかった。

「まずさ、あの本見て気が付かなかった？」

樹の困惑した表情が見えない由愛は、ニコニコと嬉しそうに声を張り上げて説明をする。仕方なく、樹は話を合わせる。

「何にですか？」

「大抵の死刑つてさ、『大勢の人間』の前で行われるんだよ」

「ああ」樹は短く答える。言われてみれば、最初の羊もギロチンもそう言った趣向があるように見える。ギロチンなんて、一種の娯乐的な執狂まであったと言う。晒首なんて言うのがあるくらいだ。

「つまりさ、圧倒的な力によって『支配』しようとした、巨大な権力と民草の人間関係だったこと」

自慢げに語る由愛に、樹は「なるほど」と顎に触れる。確かにそれも大きな括りでは人間関係だ。血に刻み込む、特別雑な人間関係だ。樹の美学に反する、人間関係だ。

「法律つてさ、作るだけじゃあ意味ないでしょ？ 夏休みの学習計画みたいなの？」

夏休み明けの考査に向けて、この高校では生徒たちに夏休みの学習計画表を書かせるのだが、それを順守するような生徒は開校以来一人もいない。

「で、守らせるために、罰を作るの」

が、そこに『罰則』があつたらどうだろうか？ 例えば、退学とか。

「そうしたら。皆、嫌でも守りたくなるでしょ？」

「その通りですね。特に、痛みと流血は『記憶』に残りますからね」「良い所に眼をつけるね。そこが味噌だよ。人間関係を、この場合は人間格差かな？ を創りだすの」

「逆らつたら、酷い目に遭う。これを刻み付けるんですね。スマートじゃあないです」

「そりやそうだよ。人間なんて万人の万人に対する闘争を愛する戦闘民族だから。ほつといたら、自分の繁栄のために全てを破壊しちゃうよ。それをなくすために、樹のいう通りに、残虐さを心と習慣に刻み込むんだよ」

逆らつては駄目だと、教え込む。母親の躰だつて、愛情以外の理由で子供を叱りつけることは多々ある。腹を痛めて産んだわけではない民衆を躰けるのに、母親の折檻よりも酷いことをするのに抵抗はそれほどなかっただろう。

例えば、民衆の前で武骨な鉄の刃で頭を落とすこともするだろう。

例えば、一日一回死刑囚の首を鋸でひくようなこともするだろう。

例えば、黒く濁った痕を残す鞭を何回も当てることもするだろう。

「こつやつて、何回も何回も『公然と殺し』をすることで、忌避されるべき殺人をすることで国家の特殊性を教え込むの。特に、初期の共同体なんて、烏合の周も良い所でしょ？ より強力な衝撃的な殺し方が必要だつたと思うの」

そうして出来るのが国家と民衆の間にある単純な暴力による人間関係だ。

由愛の話はそこで終わりらしく、「どう？ 何点？」と今回の話

の採点を求めてくる。

が、樹は黙して語らず、考えに耽っていた。

そして。

「面白い」

にやりと、残酷なくらい整った笑顔を作った。その表情を知る由もない由愛は「本当？」と無邪気に喜んでみせる。

「刑罰自体もそうですけど、普通だったら、そんな暴力認めないじやあないですか。つまり、国家はもう一個面白い対策を取ったんですよ」

頼まれてもいないのに、樹の口から説明が語られる。

「『良心』ですよ。っていうか、俺らの言う良心っていうのは、『あんな目に遭いたくない』って言う恐れが造りだしたんじゃないですか？ だって、共同体って元々『自分の利益』を増やす為に集まったわけですよ。一人一人ではなく、全員でまとまって暮らすことでリスクを減らして自分のメリットを増やすのが『社会』でしょう？ だったら、自分の繁栄のために周りを破壊する行為は、至極当然じゃあないですか？」

元々、個人の都合で共同体は作られた。なのに、巨大になり過ぎた共同体は、共同体のために利益を追い求め始めてしまう。これは仕方がない矛盾だと言えるだろう。全体と個々の利益だったら、全体の利益を追うのが当然だろう。

しかし、それは何故だろう？

どうして、他人のためなんて考えがまかり通るのだろうか？

それは良心からではないだろうか？ 社会的なシステムを考えるよりも先に、何も考えることなく『それは当然』だと思っていないだろうか？ 教えられてきたのではないだろうか？

それが『良い事』だと教わって来たのではないだろうか？

「良心の起源？ なかなか大きな話に膨らませるね」

「『痛んだ良心』ですよ。共同体が大きくなるにつれて出てきた矛盾。それを訴える人間は殺す。残虐に。そうすると、矛盾を訴えよ

うとは思わないでしょうか？ でも、逆らいたいと思ってしまう。自分を正しいと思いたくなってしまう。それを無理やり納得させたのが『痛んだ良心』です。強大な国のやることを『正しい』と思い込むんです。刻み込まれた血と死によって。それに従うことを正しいとして、人は『良心』と呼ぶんです。恐怖から、逆らわないことを利口だとして、自分を善良な人間だと思い込むんじゃないですかね？」

「でも、そう言った残虐な行為はなくなってきたよ？ 今じゃあ、先進国のほとんどは死刑反対だよ？」

もつとな由愛のツツコミに、樹は目を閉じて思考を巡らす。答えはすぐに出た。

「それも、『痛んだ良心』ですよ」

多分。と自信なさそうに樹は付け足した。

「もつとも共同体でしちゃあいけないのが、殺人ですからね。『痛んだ良心』は無意識にそれを悪とみなしてしまうんじゃないですか？ もう、明確な理由もなくただの感情論が通ってしまうほど、『痛んだ良心』が浸透した世界圏では」

「なるへそねー」樹の話の聴いて気の抜けた返事をする由愛。「それで、はしゃぎ過ぎた国家は潰れちゃったわけ？ それでそれで、法律とかで禁止したわけ？ 『痛んだ良心』で」

「改めて言われると、結構きついですね。なんでしょう『痛んだ良心』って」

思いつきで口にした単語の稚拙さに、すこし羞恥を覚えた樹。

もつとも由愛の言いたいことは、そんな事ではなかった。

「テンション高く語る樹が動くたびに、私の身体のうちこちが悲鳴を上げるんだよね」

今更過ぎる苦情に、樹は「でも座り心地は最高です」と適当に褒め言葉を送っておく。

単純な由愛は「そう？ ならいいけど」と心底喜んでくれた。褒め甲斐のある奴である。

「話を戻しますと、残虐性って言うのが国家との人間関係って言う話は面白かったですよ」

「樹は死刑反対派？」

褒められたのが本当にうれしかったらしく、背中に頼ずりをして
いる感覚が何とも言えなく気持ち良かった。

「話を更に戻しちゃうんですね」

が、話の脈絡のなさには呆れるしかなかった。人の話をしっかりと聞いていたのだろうか？

「俺はノーコメントで。色々な団体が五月蠅いですからね」

「大物政治家じゃあないんだから、樹は何を言ってもいいと思うけど……」

「だって、バカらしいじゃあないですか。一つの事象に対して互いの意見をぶつけるなんて。多角的な意見なんて持ちようがないですし、客観的視点なんてどこにもない」

「そりゃあ、どれだけ頑張っても主観的な意見しか言えないよね」
結局、何処まで行っても他人同士は理解しあえない。ひよっとしたら、自分のことですら何もわからないのが人間だろう。甘えが過ぎる意見ではあるが、樹はそれでいいと思っている。

だからこそ、人間は関係を持つとうとする。それが樹にとっては最高の娯楽であった。

「あ。でも俺、死刑反対派も賛成派も納得させる方法を思いついたんですよ」

「おお！ それは如何なる方法で？」

「簡単に言うと、噂と同じですよ」

今の遙と齊藤の関係は限りなくグレーな状態である。

周囲からは付き合っていると思われる。が、付き合っていない可能性もある。噂を流した樹本人ですら、その真実は知らない。本人たちに訊くまで、その二つの可能性は確実に存在しているわけである。

「あー、ねこを箱に入れるアレね」

読書家の由愛は、すぐに樹が言いたいことを理解した。少しでもSFをかじっていれば聞いたことがあるであろう、有名な量子論の思考実験。

そこまで思考が追いつけば、あまりにずさんな樹の考えに由愛は苦笑せざるを得ない。

「囚人を外から覗けない部屋に入れて、毒ガスを流すんですよ。猛毒ガスです。そうすると、その中では、『囚人が生きている可能性』と『囚人が死んでいる可能性』が重なり合った状態になるんです。どうですか？　これなら、賛成派も反対派も自分の都合のいい可能性信じればいいし、部屋を開けなければ、永遠にその問題は停止したままじゃあないですか？」

「いいけどね、その部屋を開けたくなるのが人間なのよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7310o/>

死刑執行中脱獄進行中

2010年11月5日20時25分発行